

| | |
|------------------|---|
| Title | 考古資料の接合：石器研究における母岩・個体問題 |
| Sub Title | Analytical reviews of conjoinable stone artefacts from palaeolithic sites in Japan |
| Author | 五十嵐, 彰(Igarashi, Akira) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1998 |
| Jtitle | 史学 (The historical science). Vol.67, No.3/4 (1998. 7) ,p.105(465)- 128(488) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980700-0105 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

考古資料の接合

—石器研究における母岩・個体問題—

- 一 序
- 二 接合研究史
- 三 破壊と接合の類型
- 四 接合研究の内容
- 五 接合資料の認識例
- 六 「個体」別資料とは
- 七 議論
- 八 総括

一 序

物は、いつの日か必ず壊れる。壊れた物は、必ず接合することができる。考古学が対象とする資料は、壊れて廃棄された物である遺物や廃棄された構造物である遺構が中心である。遺物と遺構からなる遺跡とは、言い換え

五十嵐 彰

ればそのほとんどが破損品の集積なのである。考古資料の様々な素材の種類や所属する時代の違いにも関わらず壊れて捨てられた破損品の接合が、英米 (*refitting*)、フランス (*remontage*)、ドイツ (*zusammensetzen*) 等いずこにおいても基本的に欠かせない研究手法となっている⁽¹⁾ 由縁である。

完形品と破損品とは、それぞれ有する情報の質が異なる。物の形自体が有する情報量という点からすれば、形が完全な完形品は、形が不完全な破損品に優る。しかし破損品同士が接合すれば、接合品は完形品の有さない別種の情報を保持することになる。すなわち何時、どこで、如何にして壊れたかといった当時の人間行動に関する情報を導き出すことが可能となる。

しかし時代ごとあるいは材質ごとに専門の細分化がな

されている日本考古学においては、本来基礎的な研究方法である接合に関する用語体系の整備や理論的な位置付けが放置されてきた。特に石器研究においては日本独自と云われている「個体」別資料分析との関連性から、その混乱が著しい。本稿では、考古資料全般が有する接合研究の意義について論じ、特に石器資料について現状と問題点を指摘したうえで、接合資料に関する認識モデルを提示する。

二 接合研究史

最初に石器の接合がなされたのは、一九世紀の後半に遡る (Spurrell 1880)。イギリス・ベルギー・フランス・エジプト・ドイツ・デンマークなど各国ともほぼ同時期に同じ様な試みがなされている (Cziesta 1990 p. 35)。ただし単に接合するだけに止まらず石器以外の接合資料や使用痕分析の成果と組み合わせた空間構造の復元へと研究視点が変化したのは、パンスヴァンの調査によって新しい先史学概念が確立する一九六〇年代の後半以降である (Leroi-Gourhan & Brezillon 1996・72, Cahen, Keeley & Van Noten 1979)。このことは、考古学の目的が時空間軸の特定という編年作業から考古資料を人間

行動の痕跡として理解する古民族学的分析へと変化したことによる。その後、七・八十年代を通じて体系的な接合研究が推進され、遺物自体の復元から遺跡が形成された要因の解明へと大きく進展していった。

日本において石器の接合状況が初めて本格的に分析されたのは、成田遺跡の資料についてである (松沢一九六〇)。接合資料をもとに後に「剝離経過分析方法」(松沢一九九二)と称された手法によって剝片剝離の過程が動的に把握された。その後一九六〇年代を通じて複数の接合例が報告されたが、いずれも石器自体の接合のみを提示するだけで、接合資料の出土位置に言及して遺跡の空間分析に至るものは見当たらない (麻生一九七五)。砂川遺跡で提示された平面分布図 (戸沢一九六六) には接合線こそ示されていないが、原石の「個体別」にまた接合資料別に記号を違えて表示され、初めて平面分布と関連した考慮がなされた。接合線の引かれた分布図が示されたのは、翌年の中本遺跡であり、検出された資料群が「同一時期の所産」であることの根拠とされた (加藤・桑原一九六九)。

一方、土器の場合は、石器よりもはるかに早くから接合作業が行われていたが、接合という事象を出土状態と

関連させる考え方は、石器と同様に一九六〇年代の後半に至るまでなされなかった。先駆的な分析として、接合した土器の分布から、その移動要因を自然要因と人為要因にわけて考察した例がある（西家一九六八）。土器片の接合距離を「転移量」として地形の傾斜角度と併せて考慮し、自然要因として理解できない事例に関しては、その要因を廃棄行為に求めている。こうした試みは、近世寺院址の間取りを復元する手法としても援用されていった（加藤・宇田川一九七三）。七〇年代から八〇年代にかけての住居址間における土器の接合研究については詳細な分析が加えられている（桐生一九八九a）。

一九八七年にはドイツで石器の接合に関する国際シンポジウムが開かれ（Czielska, Eickhoff, Arts & Winter eds. 1990）、一九八三・八八年には土器や動物骨をも含めた接合全般に関するシンポジウムも開催されている（Hofman & Enloe eds. 1992）。欧米で接合研究が盛んになった背景には、遺物の空間分析に應用されていた統計的な手法の行き詰まり、遺跡形成とそれに関わる埋没後のプロセスに対する関心が挙げられる（Czielska, et al. eds. 1990 p.1）。日本においても、九〇年代後半になって「接合資料を読む」と題するシンポジウムが開催され

たが、事例報告の多くは石器製作に関する技術的分析を主としたものであった（岩宿文化資料館一九九六）。

石器あるいは土器それぞれ別個に接合作業の可能性が模索されたが、考古遺物それ自体の復元という視点から、遺跡研究を通じた行動復元を志向するに至るまでには大きな意識変革が必要であることが伺える。もちろん、トレンチ調査といった限られた範囲から出土した資料群のみを対象とせざるを得なかった（最初から操作対象を限定していた）時代的制約から、広範囲な地域を調査し距離を隔てた複数の地点（遺構）間を同時に整理するように変化してきた外的な条件も大きく作用していたと思われる。しかし一方で、「実体としての遺物そのものに対して、その諸関係」（近藤一九七六、二二頁）を重視する、さらには「発掘とは関係を追及することである」という宣言（近藤一九八一、三四頁）に至る考古学という学問の内的な動機が大きく作用していたことも確かであろう。

三 破壊と接合の種類

ある機能を果たしているものを壊すこと、あるいはある機能を果たしているものが壊れることを「破壊」とい

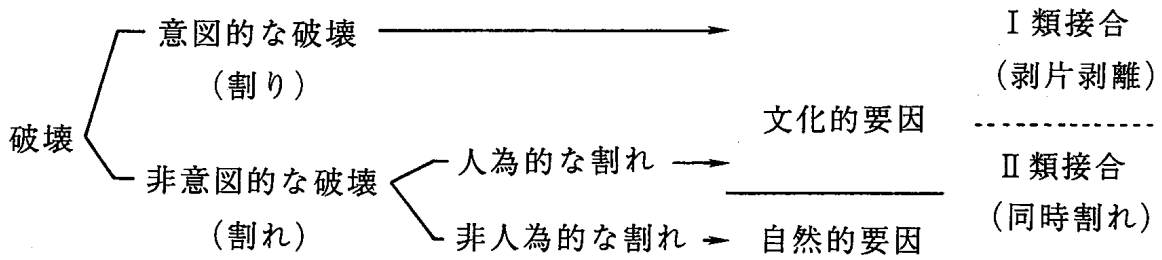


図1 破壊と接合の類型区分

う。破壊には、意図的な破壊（壊す）と意図せずに生じる破壊（壊れる）がある（図1）。さらに石器製作に限定すれば、意図的な「割る」行為（割り）と意図しない「割れる」行為（割れ）に区分することができ（山中一九九六）。すなわち考古資料に見られる「破壊」現象は、行為者の意図の有無によって大きく二つの類型に分けることができる。意図的な破壊は、「新たな機能の創出」である。道具を作り出す素材に対して行われることが多く、代表的なものには石器の剥片剥離、調整加工などがあげられる。石器資料に対して設定されている様々な剥離技術や製作技法などは、素材である石をど

のようにして割るか、石の「割り方」の違いに基づいている。一方、意図しない破壊は、「従来の機能の喪失」であり、さらに人為的（文化）要因によるものと非人為的（自然）要因によるものに区分される。非意図的かつ人為的な「割れ」には、「事故割れ」と呼ばれるもの（折れ）と呼ばれる「横割れ」、シレ氏割れと呼ばれる「縦割れ」、あるいは節理面や急激な温度変化によるはじけなど様々な「割れ方」がある。非意図的かつ非人為的な「割れ」とは、埋没の過程で生じた破壊が主に該当する。

破壊には必ず接合という事象が存在するが、行為者の意図の有無によって設定される二種類の破壊には、それぞれにほぼ対応した二種類の接合形態がある。I類接合（剥片剥離面での接合）は、意図的な破壊によるものであり、II類接合（折れ面・節理面での接合、土器・礫などの接合）は非意図的な破壊によるものである（五十嵐一九九一・九七）。同様の区分は、「I種接合」（剥片剥離工程に従う接合）、「II種接合」（主として破損したものの接合）として既に示されている（山下一九八〇、四〇四頁）。さらに剥片剥離接合・破損接合・調整加工接合という三種類の接合区分も、提唱されている（Cristina

1990)。Ⅰ類接合は、常に接合資料相互の時間的前後関係の明示が可能であるのに対して、Ⅱ類接合は、一般的に「同時割れ」を示し接合資料相互に時間的前後関係を示さない。ただしⅡ類接合の中でも破壊の後に接合資料双方が使用履歴の違いを示す場合、すなわち一方が新たな道具として再利用された場合には廃棄に至る時間差を示すことができる(図2(4)・(5))。

「剥片剝離」という破壊現象とそれに対応する「剝離面接合」という接合形態は、意図的な破壊であり常に接合資料間の時間的前後関係を示しうる特殊な事例である。同様に、意図的な剝離である「割り」に対する「折り」、非意図的な剝離である「割れ」に対する「折れ」を設定することもできる。ただし、考古資料である石器の「折れ面」の観察から両者を識別することは多くの場合に困難である(西秋一九九六)。またⅠ類接合は、石器の製作(技術論)という遺物研究と石器の廃棄(分布論)という遺跡研究の双方に関わるのに対して、Ⅱ類接合は主に後者のみ関与するという大きな違いがある。

四 接合研究の内容

石器と礫の接合作業の意義については、技術論・型式

論・分布論の三点に要約されている(館野一九八〇)。技術論・型式論は遺物研究に、分布論は遺跡研究として区分できる(五十嵐一九九二)。

遺物研究としては、石器製作過程の復元・技術的変異の同定(後藤一九八五、会田一九九二、松沢一九九二、謝ほか一九九四など)、石器型式の相対性の認識(長崎一九九〇、阿部一九九三)、原石の復元(渡辺一九九六)、素材形態の復元(図2(2)・(3))などが挙げられる。また石器が廃棄される契機の問題、すなわち「管理的」石器では道具の破損および消耗、「便宜的」石器では作業の終了という廃棄要因に関する問題(阿子島一九八九・九二)に対して、使用痕研究とともに接合研究が有効である。

遺物の分布状況を解釈するという遺跡研究を行う際には、現在の分布がどれだけ過去の人間行動を反映しているのかという評価が欠かせない。そのために現在の遺物分布状況を形成したと考えられる二種類の要素、すなわち自然要因と人為要因の識別が必要とされる。自然要因については、遺物が埋没した後どのような過程を経て現在の検出状況に至ったかという遺跡形成に関わる問題である(Schiffer 1987, Goldberg eds. 1993)。重力などに

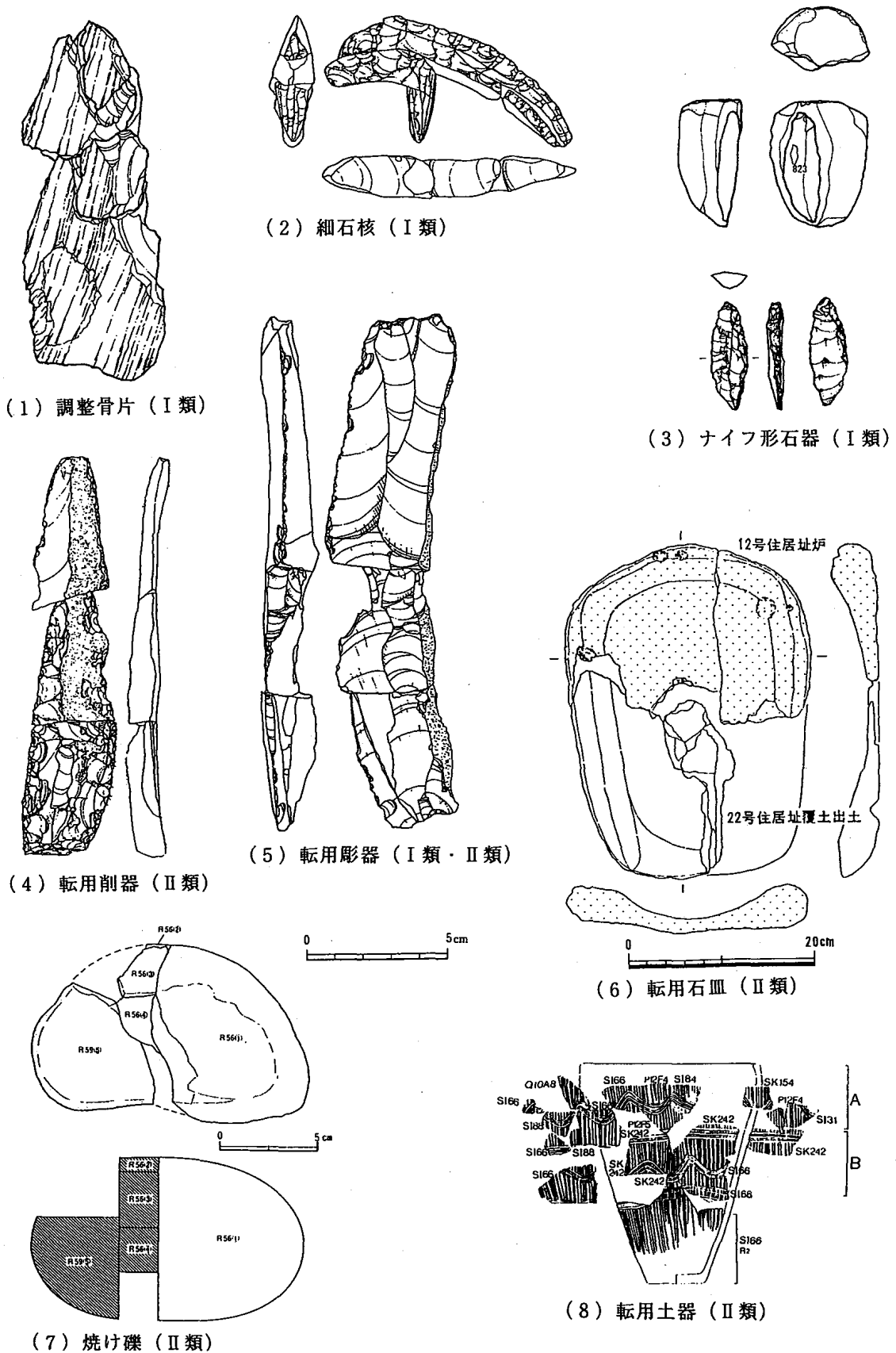


図2 様々な接合形態

- (1) 立が鼻遺跡 (野尻湖発掘調査団編 1997)
- (2) (5) 檜口遺跡 (立木編 1996) (3) 南鍛冶山遺跡 (望月編 1996)
- (4) 川西C遺跡 (北沢 1997) (6) 自由学園南遺跡 (桐生 1989b)
- (7) 匂坂中遺跡 (竹内 1996) (8) 宇津木台D地区 (黒尾・小林 1996)

よる遺物の移動現象は、あらゆる資料に対して物理的に作用するため、大きさなどによる移動の選別状況の検討が必要となる（阿部一九八二、佐藤一九八五）。破壊後になされる人為的な移動の可能性が低い遺物、すなわち被熱剥片・小礫片・碎片などⅡ類接合の分布状況は、埋没後の非文化的移動に関する良い指標となる。

自然要因による分布状況の検討がなされた後に、人為要因による分析単位の同定作業が行われる。三次元空間に位置する資料群に対して、垂直方向と水平方向の二種類の区分作業が必要となる。垂直方向に関する操作とは、「文化層」の区分、「生活面」の同定である。こうした作業は、対象とする資料の統合性の評価に関わる。垂直方向の遺物の拡散現象については、様々な事例によって追認されており（Villa 1982, Hofman 1986, 加藤・岡崎一九八七）、生活面が重複している遺跡の内的構造を解明する際に回避できない問題である。特に、資源収集活動を遂行する際に戦略上重要となる地点では、回帰的に居住がなされること、その結果として重複した堆積物が形成されるといふ指摘（阿子島一九九六、二二頁）は、接合作業を通じてなされる分析単位（生活面）の精度が、行動復元の成否の鍵を握っていることを示している。石

器資料の層間接合に対しては、自然要因による拡散現象のほか、出土層位と剝離順序が相関する場合、すなわち初期に剝離された剥片は下層に末期に剝離された剥片は上層に分布する場合には、廃棄された石核が層形成後に恐らく異なる集団によって再利用された可能性（*Raw Material Scavenging*）があることも考慮されなければならぬ（Larson & Ingbar 1992）。多層位間の「同一母岩」分布は、後に触れる「同一母岩認識」と併せて多くの問題を有している。母岩別資料の垂直分布状況を文化層区分の的方法的手段として採用している例も多い。母岩別資料番号を文化層ごとの通し番号とするか、あるいは文化層に関わりなく全資料を通じての通し番号にするか、「母岩別資料」と「文化層」の識別作業は循環論の様相を呈している。

水平方向に関する操作については、遺物集中部の区分、集中部相互の同時性の検証、活動領域の同定などが含まれる。石器集中部の成因として遺棄か廃棄か、あるいは製作と廃棄の場が一致していたかといった諸問題は、集団の居住形態と直接に関連する（西秋一九九四、野口一九九七）。接合類型ごとに、接合距離と接合方向を分析し、使用痕や微細剥片の分布など他の属性と照らし合わ

せることで、活動領域を認定し居住活動の多様性や重複性を示すことができる。重要なのは、複数の異なる情報源から導き出された解釈を相互に検証することによって解釈の幅を限定していくことにある。

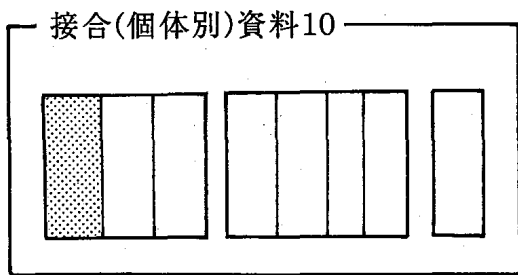
土器資料の接合は、一般的には「器(うつわ)」としての機能が失われた時点のみを示すⅡ類接合である。ただし遺構間の接合資料に出土層序の差異がある場合(黒尾一九八八)、あるいは一方が炉体などの転用品として再利用されている場合(桐生一九八九a、小林一九九三、黒尾・小林一九九六)には、接合資料相互の廃棄に関して時間的前後関係を明らかにすることができる。縄紋時代の炉体土器は、本来の土器としての機能が終了した後、転用部分が遺構である住居址の炉内に固定され、不要部分の多くが異なる遺構覆土に含まれるという特殊な遺存状態を示す(図2(8))。石皿と呼ばれる石器が本来の機能を失った後に炉石として転用される場合も同じ脈絡にある(桐生一九八九b、図2(6))。すなわち、意図的破壊によって新たな機能が付与された転用部分と従来の機能が失われたままの不要部分が、遺構内での位置付けに明確な差を有して遺存しているのである。そのため、本来は時間的前後関係を示さないⅡ類接合にも関

わらず、時間差の推定が可能となっている事例である。弥生時代の遺構間での接合土器については、「破片化した土器の儀礼的使用行為」(若林一九九六、十八頁)についても考えられている。Ⅱ類接合を示す土器片・礫片なども分離後の履歴の違いが、接合資料相互の風化度・被熱・付着物の差異となって表われていることがある(図2(7))。分離後の履歴の違いが、何に由来するのか、すなわち再利用などの文化要因によるものか、それとも埋没後の堆積環境の違いなどの自然要因によるものかを識別する必要がある。

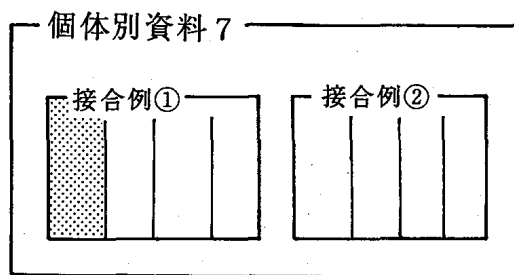
五 接合資料の認識例

「明らかに同一原石の同一個体でありながら全く接合しない資料」(戸沢一九六八、八六頁)を研究対象として以来、意図的な破壊行為の結果である接合資料を含めた土器資料の提示方法に関して様々な試行がなされてきた。ここでは、「母岩別資料」・「個体別資料」・「接合資料」の相互関係がどのように認識されてきたか、石器資料の具体的な提示例を検討する(図3)。一個の方形で個々の石器資料を、連結した方形群で接合資料を表し、非接合資料を含む分析単位(多くは複数の接合資料群な

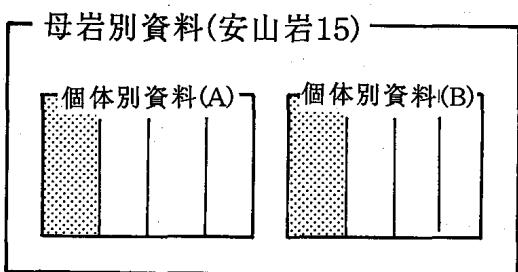
① 砂川遺跡 1次(1968)



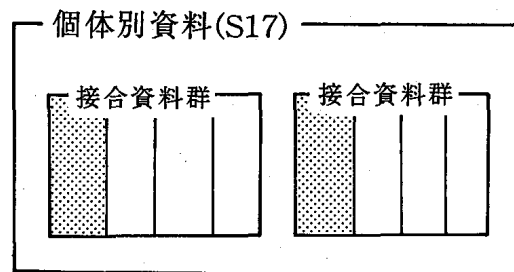
② 砂川遺跡 2次(1974)



③ 鈴木遺跡 I (1978)

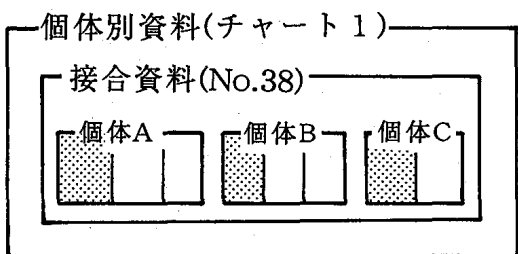


④ 寺谷遺跡(1980)

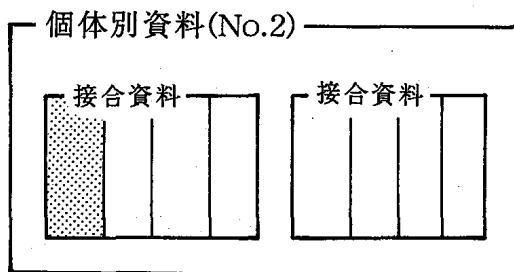


⑤ 多聞寺前遺跡 II (1983)

(IV中fブロックの)

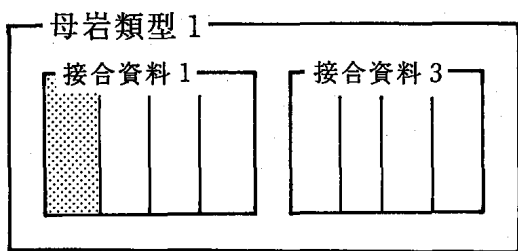


⑥ 栗原中丸遺跡(1984)



⑦ 恩原 2 遺跡(1996)

M文化層



⑧ 柳又遺跡A地点 VII (1997)

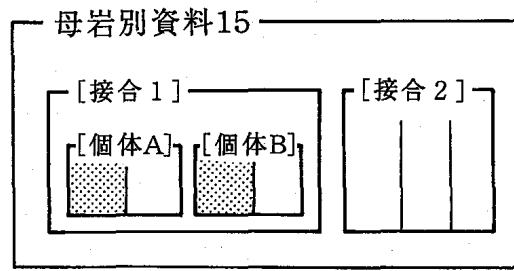


図3 母岩別資料・接合資料の認識例

などを構成要素とする)を外枠で表す。網目のかかった方形は、石核を意味する。なおこの図は、あくまでも各遺跡の報告者が接合資料を含む石器群をどのように認識しているかを模式的に示すものであり、個々の様相を正確に表現したものではない。

①砂川遺跡第1次調査(戸沢一九六八)

三六一点の資料が、二八の「個別別資料」に区分された。接合資料の含まれる「個体」が十五、複数の非接合資料で構成される「個体」が六、一点のみの「個体」が七である。「資料番号」は、「個別別資料」と「接合資料」の両者に兼用されている。

②砂川遺跡第2次調査(戸沢ほか編一九七四)

四三一点の資料が、四四の「個別別資料」に区分された。接合資料の含まれるものが七、複数の非接合資料で構成されるものが十、一点のみのものが二七、そのほか帰属不明資料がある。「資料番号」が、「個別別資料」として用いられ、接合資料を表わす用語として「接合例」が用いられている。

③鈴木遺跡I(鈴木遺跡調査団編一九七八)

一〇八六点の資料が、文化層に関わりなく八六の「母岩別資料」に区分された。一個の「母岩」が複数の「個

体」に分割されている資料に対して下位項目の「個別別資料」が設定された。

④寺谷遺跡(鈴木編一九八〇)

総数四九二四点のうち、「個体」識別対象資料は三一九八点、「個体」識別資料は一三二五点である。「個別別資料」は一二六例、単独資料は二二例である。用語としては上位項目に「個別別資料」、下位項目に「接合資料群」を用いている。

⑤多聞寺前遺跡II(戸沢・鶴丸編一九八三)

IV層上部から七五八二点、IV層中部から五六二点、IV層下部から四十点の資料が出土している。大分類として「個別別資料」が用いられるが、IV層出土資料については、設定された「ブロック」毎に「個別別資料」番号が与えられている。「個別別資料」に含まれるものに「接合資料」があるが文化層に関わらず遺跡全体の通し番号が付されている。分割が認められる接合資料には、下位項目として「個体」が用いられている。

⑥栗原中丸遺跡(鈴木ほか一九八四)

第V文化層として三四三一点の資料が、三四六の「個体」に区分されている。接合資料を含む複数の資料で構成されるものが一四七、単独資料が一九九である。上位

項目に「個体別資料」（本文中では単に「資料No.」、下位項目に「接合資料」が用いられている。

⑦ 恩原2遺跡（稲田編一九九六）

M文化層の通し番号として「母岩類型」が用いられている。下位項目には「接合資料」が用いられている。M文化層の総数は四三一点で、五十の「母岩類型」に区分されている。接合資料が含まれるものが十六、複数の非接合資料で構成されるものが九、一点のみのものが二五、そのほか帰属不明資料がある。

⑧ 柳又遺跡A地点（宮尾編一九九七）

文化層ごとの通し番号として「母岩別資料」を用いる。接合資料を「接合」として表示している。接合資料の中に複数の石核が認められる場合には、下位項目として「個体A」「個体B」とする（第V層文化層母岩別資料15など）。母岩別資料に含まれる接合資料それぞれに石核の存在が認められる場合には、「接合」という用語の代わりに「個体A」「個体B」が、用いられている（第VI層文化層母岩別資料10など）。

六 「個体」別資料とは

砂川遺跡1次（①）では、「個体別」という用語は明

確には用いられず、「資料番号」が「個体別」と「接合資料」の双方に用いられている。砂川遺跡2次（②）では、接合資料は「接合例」として、複数の接合資料と非接合資料を含むものは「個体別資料」として位置付けられた。確実に同一の原石に属する「接合資料」とは異なり、色調・挟雑物・礫面などの肉眼的特徴に基づいて同一の「個体」を識別していく方法は、多くの問題を有しつつも、その新たな可能性により一九七〇年代を通じて様々な遺跡の発掘報告書において急速に採用されていった。「個体別資料」を接合資料および非接合資料を含む上位項目に用いる例（④・⑥など）は、初出の砂川遺跡例を踏襲したものと思われる。鈴木遺跡I（③）では、「個体別資料」という用語が「母岩別資料」の下位項目として用いられている。^③「安山岩15」の事例は、後に一般書にも引用され（加藤・鶴丸一九八〇、一七二頁）、大きな影響力を与えたと考えられる。ある「原石」から生じた資料群を「母岩別資料」とする一方、ある「原石」を分割した後の複数の剝片剝離作業単位に対して「個体別資料」という用語をあてる認識である（柳沢一九七九など）。多聞寺前遺跡II（⑤）でも同様の構成をとるが、集中部ごとに「個体」別番号が与えられており、

さらに上位項目と下位項目に「個体」という類似の用語が用いられており、理解が困難である。

まず用語使用上の問題として、上位項目の用語に「個体別」を用いるか、「母岩別」を用いるかという点に大きな違いが認められる。また石器群の内容を認識する際に、同一母岩資料の分割あるいは剥片石核の存在を認め、同一の剥片剥離の進行を有意な単位として「個体」の語を与えるか否か、という認識の相違が用語の不統一を招いている。上位項目に「個体」別という用語を使用する場合には、「原石」の分割あるいは剥片を用いた石核の使用を想定していない。一方、上位項目に「母岩」別を使用する場合、「母岩」を分割した礫石核あるいは剥片石核を「個体」として認識している。砂川遺跡1次(①)・2次(②)・寺谷遺跡(④)・栗原中丸遺跡(⑥)は前者に、鈴木遺跡I(③)・多聞寺前遺跡II(⑤)・柳又遺跡A地点VII(⑧)は後者に相当しよう。

「個体別資料」という言葉の意味する内容については、「一個の母岩に接合・復元される関係にある遺物のまつまり」(安蒜一九七七、五一頁)、「石器製作作業の単位としての原石」(戸沢・安蒜一九八三、九頁)あるいは「原石単位に分けられた石器群の個々」(安蒜一九八六、

十一頁)と微妙にニュアンスの異なる説明がなされてきた。最近のある用語体系の説明では、「個体別資料」という言葉を「母岩別資料」という語と同義に用いている(大塚・戸沢編一九九六)。ここに大きな混乱の原因が認められる⁽⁴⁾。ある「原石」を対象に、何らかの破壊行為を行うことよって複数の石器類(剥片・碎片・石核など)が生じたとき、本来接合という現象の有無に関わらず、その全体を指す用語が必要である。これに本稿では「母岩」という用語をあてよう。また主に剥片剥離行為という意図的破壊行為よって形成された資料群は、常に剥がされた「石核」と剥がした「剥片類」で構成される。意図的な「割り」行為を分析の単位として採用するならば、分析単位の統合性は剥片剥離を表わす「石核と剥片類の接合」という現象で保証されなければならない。これを「個体」として用いる。「個体別資料」あるいは「個体」という用語を「石核」と同義に把握する認識もここに由来するものと思われる⁽⁵⁾(栗島一九八六・八七)。

ある「原石」を単位とする「母岩別資料」と剥離行為を単位とする「個体別資料」は、決して適宜に言い換えが可能な概念ではない。接合の有無に関わらず本来一点の資料のみからでも同定が可能とされている「母岩別資

料」と石核との接合資料あるいは「母岩」分割の認められない接合剥片群によつてのみ識別が可能な「個別別資料」とは同等なものではなく、常に前者が後者を包含する入れ子状態の関係にある。

こうした用語に関わる認識上の問題とともに、接合資料と「母岩」別資料をどのように捉えるかという方法上の面で、大きく二つの立場がありうる。対象とする石器資料の色調・肌理・内容物などに基づいて同一の母岩群別したものに「接合可能資料 (probable refittings)」

(Cziesla 1990)、「分析的母岩 (analytical nodules)」(Larson & Ingbar 1992) あるいは「分析的礫 (analytical cobble)」(Hofman 1992) と名付けて分析する例がある。

共に接合資料を補強するための分析手段として採用されており遺跡内に持ち込まれた母岩の最小個体数などを算出している。あくまでもこの分析は接合資料を中心に構成されており、日本で用いられている母岩別資料とは明らかに異なる。接合資料の拡張概念として用いられており、接合資料を含まない母岩別資料は考慮されていない。日本では接合資料と母岩別資料は、資料番号の与え方も含めて切り離された形で認識され分析が行われてきた。分析内容も、接合資料は石器の製作技術的な復元、「個

体別資料」は集中部相互の関連性といった分布論に重点が置かれている。また一点だけのいわゆる「単独資料」までも「母岩別」に識別されていることが特徴である。Aという母岩と同じ母岩と考えられるAを見い出すのと、Aという母岩と同じ母岩がないという非Aの存在を証明するのは同じ構造にある。

七 議 論

かつて接合資料と「個体」別資料は、本質的に性格が異なることから資料提示の方法も両者を区別していく必要が唱えられたが、実質的な議論の深まりを見せることなく経過した(辻本一九八一)。「個体」別資料分析に対しては、一九九〇年代に入り様々な問題点が指摘されてきた。例えば「砂川的分析の課題」として「母岩分類の成否が分析に大きく影響する分析」であること、そして「実際には確実な母岩分類は極めて難しい現実」が指摘された(岩崎一九九二)。また「個体別資料分析」の導き出した結果に対して「決定論的な解釈が行われても、その解釈の妥当性は、個体別資料分析の方法自体には内包されていない」という方法論上の問題点も指摘されている(小野一九九五)。さらに、工程別異所製作の可能

性からの批判(佐藤一九九二、一八六頁)、あるいは分類基準の客観性をめぐる議論がなされていないこと(池谷一九九六a、一一五頁)が指摘されている。「個別別資料分析」に対する研究者間での評価の違いも明らかになってきた(橋本一九九二、栗島一九九二)。母岩別資料の「機械的な類別と解釈」に対して疑問を表明し、製品を含むか含まないか、あるいは剥片をどれだけ含むかといった基準を設定し母岩別資料の構成を説明する新たな方向性も示されている(稲田一九九三)。

母岩は、露頭などから直接切り出すような例を除いて、多くの場合は石器の母材となる河原石あるいは礫層中の礫などを単位とする。こうした母岩は、遺跡内においても相互に識別が可能なほど多様性を有していることが多く、従って遺跡内での母岩認識は一定の範囲内で有効である。しかし現実には同一母岩の認識に関して、完全に客観的な基準を確立することも原理的には不可能である。同一母岩の認識作業は、遺跡個々の状況(均質な石材かどうか、露頭から直接運び込まれた石材が多いか少ないか、複合的居住地か単純な石器製作地かなど)によって大きく左右される資料操作方法である。母岩を識別して分類する際に誤った情報が入り込む確率の測定や誤差を

認めた上での幅のある解釈の提示といった試みがなされることは少なく、確実な分類や記述を心がけようとする限り、常に不安がつきまとい⁽⁶⁾ている。近年になり同一母岩への帰属確率が高い資料と帰属確率が低い資料を区別して操作する試みもなされた(池谷一九九六b)。今後は、確実に同一の母岩と認定できる資料群(接合資料)、ほぼ確実に同一母岩と認定できる資料群(母岩資料)、同一母岩と認定するには確実でない資料群(石材のみが同定される資料)という確実性に応じた資料群の識別が意識的になされていくことが必要であろう。

石材については近年になり物性と産地を考慮した名称の模索がなされているが、判別基準の曖昧さあるいは肉眼での識別が困難な石材も複数指摘されており、依然として課題を残している(柴田一九九一)。石材同定を考古学的な研究視点と関連させた解釈モデルの構築が課題である(出穂一九九七)。石材の産地すなわち「原産地」項目を設定することの可能な石材は、黒曜岩(望月ほか一九九四、望月ほか一九九七)・ガラス質黒色安山岩(山本ほか一九九七)・サヌカイトなど少数に限られている。黒曜岩製石器群を対象として原産地分析と母岩の識別を併せて行なっている報告例も見られるが(笹原一九

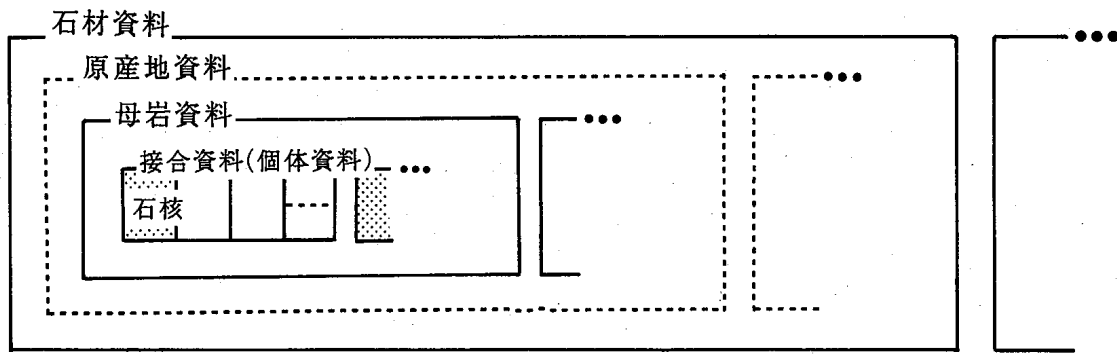


図4 接合資料の認識モデル

九七)、一般的には原産地項目を立てることのできる石材は母岩項目に不確定要素が大きいという相補的な状況が続いている(五十嵐一九九三、七〇二頁)。「個体」とは、基本的に石核と剥片の接合によって認識されるものであり、接合資料中の特殊な部分集合として位置付けられる。すなわち、石核を含まない接合資料から「個体」を認識することはできず、非接合資料は「母岩」の認識に限定される。接合資料の基本となるべき単位は、一回の打撃によって石核から剝離された剥片の剝離面に対する接合(I類)

であり、「縦割れ」「横割れ」あるいは節理面などによる接合(II類)はI類の下位項目、表示方法としても枝番などで明確に区別する必要がある。こうした石器資料の階層的な構造を示せば、以下のようなになる(図4)。
 石材資料…石器の材料とされている岩石学上の名称。
 (原産地資料)…母岩が採集された限定的な地理的範囲。
 母岩資料…遺跡に持ち込まれた他と区別しうる礫塊を単位とする。

接合資料…I類接合によって構成される(石核と剥片類の接合は個体として認識される)。

石器資料…一回の打撃によって生じる剥片類を単位とする(II類接合を含む)。

遺跡から検出される全ての石核・剥片類は、「資料番号」として整合的に表示することが可能となる。つまり、「C-1-2-3」とは、「チャートを石材とした母岩資料番号1に含まれる接合資料番号2に接合している3番目の剥片」を指すこととなる。

八 総括

1 考古資料の接合という現象は、一九六〇年代後半に物自体から物相互の諸関係へという資料論的認識の変換

に伴い初めて空間分析と関連して考察されるようになった。

2 石器の接合は、時間差を示す割り面（剝離面）接合と同時性を示す割れ面（折れ面）接合がある。土器の接合は、同時性を示す折れ面接合であるが、炉体土器などの転用品は時間差を示す。

3 意図する破壊（割り）と意図しない破壊（割れ）の識別が必要である。両者には、道具としての機能の継続性に関して大きな違いが存在する。

4 「割り」に対応する剝離面接合（Ⅰ類接合）は製作と廃棄の側面に、「割れ」に対応する折れ面接合（Ⅱ類接合）は廃棄の側面にのみ関与する。

5 接合研究は、遺物研究と遺跡研究の双方に大きな役割を果たす。特に、遺跡研究における空間分析では、垂直方向での「文化層」区分、水平方向での「集中部」区分という操作単位の根幹をなす。

6 空間分析では自然要因による移動の有無さらに使用痕分析など他のデータとの相互検証を経て活動内容の復元がなされなければならない。

7 全ての資料を母岩別に識別する「個別別資料分析」には、不確実性が常に存在する。確実に客観的な接合資料を中心とした拡張概念としての母岩資料という分析方

法の有効性が検討されなければならない。

8 石材・原産地・母岩（非接合資料を含む）・接合（石核と剝片を含む場合は個体）・石器（石核・剝片など）という整合的な資料提示が必要である。

対象とする考古資料は、常に自然・文化の両要因によって破壊され、廃棄後は重複し変形し歪められた分布状態を示す。ここから如何に目標とする分析単位を取り出すことができるか？ それには、資料の時間的限定、すなわち同時性をどのように検証し評価していくのかという作業が不可欠である。考古資料の基礎データである報告書の記載に第三者が追認できない記載があることは、科学的営為を遂行するうえで重大な障害となる。しかし、同一の母岩資料を記載していく作業については、完全に客観的なデータの提示もまた不可能であろう。現状で求められる課題は、どれだけ報告者の恣意性を減らしていくことができるかという点にある（池谷一九九六a）。

「文化層」・「石器集中部」・「母岩」といった基礎的な分析単位がどのようにして設定されたのかについて批判的に検討していく必要がある。研究対象である資料群に対して分解と統合の作業を施していく過程で接合資料に基

づく分析は、确实で有効な方法となる。

基礎データの提示としての報告書も自らの報告内容の中だけで完結する自己満足的な提示方法ではなく、あらゆる状況に対応しうる提示方法と用語体系の構築が意図されなければならない。その上で、ただ接合すればよいというのではなく接合実測図や接合分布図を材料として何をいかにして見出し出していくのかという明確な意図が示される必要がある。本稿で提示した問題の所在が受け止められ、生産的な議論がなされることによって現在の石器研究におけるもつれた糸が少しでも解きほぐされることを願う。

謝辞

鈴木公雄教授には、草稿を読んで頂いた。阿部祥人教授には更に本稿が形をなすに至る契機をも与えて頂いた。安斎正人・池谷信之・小林謙一・神保京子・丹野雅人・西秋良宏・野口 淳・山口慶一の各氏には様々な御教示を頂いた。ただし、本稿に認められる全ての誤りは、筆者の責任にある。

本稿を畏友故品川哲氏にささげる。

(一九九八・二)

註

(1) 「接合」に相当する単語として *Refitting* と *Conjoining* という二つの用語がある。*Refitting* (*Racord*) は「接合資料」*Conjoining* (*Remontage*) は「接合作業」という意味で使い分けられている用語集がある (Tixier, Inizan & Roche 1980, Inizan, Roche & Tixier 1992)。また *Refitting* を剥片剥離面での接合、*Conjoining* を折れ面での接合とする論考もある (Larson & Ingbar 1992 p.153)。しかし一般的には、厳密に使い分けられているわけではないようである (Cziesla 1990 p.36)。

(2) 山中は、もともと別のものが人間行為によって接合され、再び別れたものを「離れ」と呼び、本来同じものの「割り・割れ」と区別した。金属製品での「綴じ・留め品」、土製形象品(土偶など)、関節などを介した「動物骨」などの接合を想定している。そのほか、いわゆる複合石器や着柄石器の接合(例えば植刃槍に装着された細石刃・根挟みに装着された石鏃・木製柄に挿入された鹿角の押圧剝離具など)といった異なる材質間の接合関係も「離れ」の範疇として捉えることができるであろう。また土器や土製品に認められる補修孔やアスファルトによる接合痕跡も、一度機能を喪失した器物を接合作業によって回復させた後に再び破壊されたものとして、「離れ」の一種として考えることができる。「離れ」については、意図的な「割り」にともなう「離れ」と意図しない「割れ」にともなう「離れ」を識別することが多くの場合に困難である。行為主体の意図を基準とする「割

り」「割れ」とは、やはり別次元の概念である。

- (3) 「本報告書で用いる石器の「母岩別資料」とは、砂川遺跡の調査報告書における「個別別資料」とほぼ同義である。しかしひとつの母岩が複数の個体に分離され、そのそれぞれを用いた剥片剥離作業を展開した例がしばしばみとめられる。そのような例を、複数の個別別資料によって構成されるひとつの母岩別資料として一括したものである。」(織笠一九七八、一五頁) 前年に刊行された新橋遺跡の報告書中に、同様の記述がある(織笠一九七七、六九頁)。

- (4) 「接合 (*refit*) : 同一の原石から生じた残核・碎片・各種の剥片・石器類(個別別資料) がたがいにつながりあること。」(一八二頁)

「個別別資料 (*same core assemblage*) : 同じ原石から生まれた一連の石器群。完成した石器とその素材とされる目的的剥片、それに調整剥片や碎片といった不要な剥片、さらに原石の残滓となった残核などをたがいに接合して、もとの一つの原石を完全な形で復元することができるひとまとまりの石器群。母岩別資料ともいう。」(一一四頁)

「原石 (*raw material*) : 石核石器や剥片石器の原料とされた石。礫石と母岩がある。」(一〇一頁)

「礫石 (*nodule*) : 河原石のように表面が風化している、石器の原料とされた石。」(二五〇頁)

「母岩 (*raw material*) : 大きな岩の一部を削り取った状態の、石器の原料とされた石。」(三〇五頁)

以上の説明から「原石」は河原石のような単位の明確な「礫石」と大きな岩の一部である「母岩」とから構成されているとの認識が伺える。すると「母岩別資料」という言葉自体が片寄ったものであり、本来「原石別資料」とでも呼ぶべきものとなる。またある意味で削り取られる「大きな岩」例えば「露頭」などが、「原石」(本稿での母岩)であり、剥片剥離に適した大きさに削り取ったものは「個体」とも言える。こうした場合には「母岩別資料分析」自体の遂行が不可能となる。露頭ではなくても、黒曜岩などの同一原産地資料の「母岩別(個体別) 識別」の困難さは、既に指摘されているところである。「黒曜石の同一個体の判別については石器研究者に伝承された職人的業があるらしい。しかし原産地を踏査し分析資料を割りとする作業を続けた経験からは、原産地で一括して入手した複数の母岩から剥離された石片を、一点残らず再び母岩へ戻すことは困難と思われる。」(望月ほか一九九四、一二二頁)

(5) 「(前略) 著者は個体と石核を同様な意味で以下使用することとする。前者を主に使う根拠は、石核と我々が言う場合それは石器形態としての残核をこそ指す場合が多いこと、そして個体はその内に消費的生産の意義(個体消費⇨労働用具・ブロックの生産)、とりわけ二重の意味での生産的側面を有することに拠る。」(栗島一九八六、八五頁) 「(前略) 本論で使用する個体という言葉には、石核と石核原材としての原石という二つの意味を与えている。一方、個別別資料とは、同一個体より作出された

剥片・碎片そして石器を含んだ総称として用いていることを留意していただきたい。」(栗島一九八七、三一頁) 短期間の内に「個体」という用語の概念規定が拡張されている。「個体」という言葉は、本来、「石器の素材を作り出す剥片剥離作業を行なった結果生じた単一の石核およびそこから剥離された複数の剥片類の組み合わせ」に限定すべきではなかるうか？

(6) 「個体別資料分析」の有効性と限界について、明確な研究戦略上の位置付けを与える必要性がある」との主張(五十嵐一九九二、一七頁)に対して、「そのための概念化に性急になるとすれば、まさに方法上の倒錯になりかねない危険性を孕んでいる」(織笠一九九二、一一三頁)との危惧が示された。しかし、実際の現場に直面している中からは、既に「脱神話化」の動きが見られる。「一点一点の資料にいたるまで母岩の帰属を明確にすることはできないが、接合資料を核として母岩の主体をなす資料がある程度捕捉することは可能であった。こうした分類を「母岩」と表現すれば、内容が限界をもつにもかかわらず分類だけが一人歩きする可能性がある。したがってここでの石質分類については、「母岩類型」と呼んでおくことにしたい。母岩分類に関係して個体別資料という言葉がしばしば用いられるが、母岩の輪郭を明確にできない以上、個体の用語もここでは使用しない。」(光石一九九六、九五頁) また「ブロック間で共有される同一個体の正確な表記に至らなかつたこと」(諏訪間・堤一九九七、四九七頁)が、資料操作上の問題点として挙

考古資料の接合—石器研究における母岩・個体問題—

げられている事例もある。これはそもそも資料操作上の問題点というよりも「個体」別資料分析に内在する本質的な限界とでもいふべきである。

文献

会田容弘

一九九二 東北地方における後期旧石器時代石器群の剥片剥離技術の研究 —接合資料をもとにした剥片剥離技術分析の試み—「東北文化論のための先史学歴史学論集」加藤稔先生還暦記念会、二〇九—二九二頁

阿子島香

一九八九 「石器の使用痕」考古学ライブラリー56、ニュー・サイエンス社

一九九二 実験使用痕分析と技術的組織「東北文化論のための先史学歴史学論集」加藤稔先生還暦記念会、二七—五三頁

一九九六 マドレーヌ文化期における適応戦略と遺跡構造分析「古代」一〇一、早稲田大学考古学会、一一—二九頁

麻生 優

一九七五 概説「日本の旧石器文化」第1巻、雄山閣、四—三五頁

阿部祥人

一九八二 No. 395 遺跡「多摩ニュータウン遺跡」昭和56年度第2分冊、東京都埋蔵文化財センター、二四—二七三頁

一九九三 石器の欠損と再生加工「史学」六二(三)、三田史学会、一七—四五頁

安藤政雄

一九七七 遺跡の中の遺物「季刊どるめん」一五号、

JICC出版局、五〇―六一頁

一九八六 砂川遺跡についての一考察「砂川遺跡発掘20周年のつどい講演要旨」明治大学考古学研究室・所沢歴史研究会、九―一七頁

五十嵐彰

一九九一 石器の接合 「お仲間林1986」慶応義塾大学文学部民族学考古学研究室小報8、一七七―一八〇頁

一九九二 関東地方における石器文化の変遷に対する感想「石器文化研究」4、石器文化研究会、一六一―一七頁

一九九三 B2L層出土石器群(第V文化層)を巡る諸問題「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」慶応義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室、六六九―七〇六頁

一九九七 回顧と展望(日本 考古一)「史学雑誌」一〇六(五)、史学会、一〇―一四頁

池谷信之

一九九六a 愛鷹・箱根シンポジウムの研究史的意義「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年収録集」静岡県考古学会、一一三―一一七頁

一九九六b 旧石器時代の遺構と遺物「柏葉尾遺跡発掘調査報告書」沼津市文化財調査報告書第61集、六三―一〇二頁

出穂雅実

一九九七 常呂川流域における石器石材の基礎研究「北海道旧石器文化研究」2、北海道旧石器文化研究会、一一―一四

稲田孝司

一九九三 細石刃文化と神子柴文化の接点「考古学

研究」四〇(二)、考古学研究会、二二―四六頁

岩崎泰一 一九九二 後期旧石器時代に於ける集落・集団研究の現状認識「研究紀要」9、群馬県埋蔵文化財調査事業団、一―三三頁

岩宿文化資料館 一九九六 「接合資料を読む資料集」第4回

岩宿フォーラム、笠懸町教育委員会

大塚初重・戸沢充則編 一九九六 「最新 日本考古学用語辞典」柏書房

小野 昭 一九九三 石器の接合こぼれ話…その1「新潟考古」第4号、新潟県考古学会、四一―四四頁

一九九五 旧石器時代集団論の現状分析「展望考古学」考古学研究会40周年記念論集、考古学研究会、一七―二三頁

織笠 昭 一九七七 第二節先土器時代 1. 石器「新橋遺跡」国際基督教大学考古学研究センター OCCA.

SIONAL PAPERS 4、一八―七四頁

一九七八 用語について「鈴木遺跡I」小平市鈴木遺跡調査会、五・一〇―一頁

一九九二 持続する志「石器文化研究」4、石器文化研究会、一二〇―一二七頁

加藤晋平・宇田川 洋 一九七三 松山廃寺「松山廃寺 東京

都八王子市寺田遺跡群発掘調査報告」八王子市寺田遺跡調査会、一〇―五〇頁

加藤晋平・岡崎里美 一九八七 考古学の立場からみた土壌学「土壌学と考古学」久馬一剛・永塚鎮男編 博友社、

四五―七〇頁

加藤晋平・桑原 護 一九六九「中本遺跡 北海道先石器遺跡の発掘報告」

加藤晋平・鶴丸俊明 一九八〇「図録 石器の基礎知識Ⅰ 先石器(上)」柏書房

北沢 実 一九九七 帯広市川西C遺跡「第11回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集」世話人事務局編、二二—一頁

桐生直彦 一九八九a 住居址間土器接合資料の捉え方「土曜考古」13、土曜考古学研究会、一一—一九頁

一九八九b 住居址間遺物接合資料の効用「東京の遺跡」22、東京考古談話会、二九三—四頁

黒尾和久 一九八八 縄文時代中期の居住形態「歴史評論」五四、歴史科学協議会編、九—二二頁

黒尾和久・小林謙一 一九九六 住居埋設土器の接合関係からみた廃棄行為の復元「日本考古学協会第62回総会研究発表要旨」、八八・九頁

栗島義明 一九八六 先石器時代遺跡の構造論的研究序説「土曜考古」11、土曜考古学研究会、五五—八七頁

一九八七 先石器時代遺跡における移動と遺跡形成に関する一考察「古代文化」三九(四)、古代学協会、二—三二頁

一九九二 橋本氏見解に触れて「石器文化研究」4、石器文化研究会、一〇五・六頁

後藤秀一 一九八五 縄文時代における剝片生産について——接合資料を中心として——「太平洋史窓」4、史窓会、一一—二七頁

小林謙一 一九九三 縄文遺跡における廃棄行為復元の試み——住居覆土中一括遺存遺物及び炉体土器の接合関係——「異貌」13、共同体研究会、一七—四五頁

近藤義郎 一九七六 原始史料論「岩波講座 日本歴史」25 別巻2 日本史研究の方法「岩波書店、一〇—三六頁

一九八一 発掘の話「歴史評論」三七三、歴史科学協議会編、三二—三八頁

笹原芳郎 一九九七 箱根西麓下原遺跡の分析「沼津市博物館紀要」21、沼津市歴史民俗資料館、二—四二頁

一九八五 斜面地における遺跡形成「研究論集Ⅲ」東京都埋蔵文化財センター、一七五—一八八頁

一九九二 「日本旧石器文化の構造と進化」柏書房

柴田 徹 一九九一 考古学のための岩石鑑定Ⅱ「図鑑」東海大学校地内遺跡調査団報告」2、東海大学校地内遺跡調査団編、二二八—二四二頁

謝 飛、シツクK.D.、トスN.&クラークJ.D. 一九九四 岑家湾遺跡における1986年出土石製遺物の接合研究「旧石器考古学」49、旧石器文化談話会、一一—一四頁

諏訪間順・堤 隆 一九九七 柏ヶ谷長ヲサ遺跡における旧石器時代石器群「柏ヶ谷長ヲサ遺跡」堤 隆(柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団)編、四七五—五〇〇頁

一九九六 属性検討のまとめ「匂坂中遺跡発掘調査報告書Ⅱ」静岡県企業局・磐田市教育委員会、七二—五—七四〇頁

館野 孝 一九八〇 接合の意義「多摩蘭坂遺跡」安孫子昭

二・堀井晶子編、三七・三八頁

立木宏明編 一九九六 「樽口遺跡」奥三面ダム関連遺跡発掘

調査報告書V、新潟県朝日村教育委員会

辻本崇夫 一九八一 先石器時代遺跡の構造(質疑)「報告・

野辺山シンポジウム1980」明治大学考古学研究
室、七七・七八頁

戸沢充則 一九六八 埼玉県砂川遺跡の石器文化 「考古学集

刊」四(二)、東京考古学会、一四二頁

戸沢充則・安藤政雄 一九八三 解説・日本の先石器時代文化

「探訪先石器の遺跡」有斐閣選書R18、一一一九頁

長崎潤一 一九九〇 後期旧石器時代前半期の石斧「先史考古

学研究」3、阿佐ヶ谷先史学研究会、一一三三頁

西秋良宏 一九九四 旧石器時代における遺棄・廃棄行動と民

族誌モデル「先史考古学論集」3、安齋正人編、八

三一九七頁

一九九六 打製石器の製作と折断「東海大学校地内

遺跡調査団報告6」東海大学校地内遺跡調査団編、

一一七一―一二九頁

西家 稔 一九六八 土器片の移動現象について「多摩ニュー

タウン遺跡調査報告V」多摩ニュータウン遺跡調査

会、八二―八四頁

野口 淳 一九九七 遺跡における石器組成「旧石器考古学」

54、旧石器文化談話会、三七―四七頁

野尻湖発掘調査団編 一九九七 「最終氷期の自然と人類」共

立出版株式会社

橋本勝雄 一九九二 栗島義明氏へのコメント「石器文化研

究」4、石器文化研究会、一〇一・二頁

松沢亜生 一九六〇 石器研究におけるテクノロジーの一方

(2)「考古学手帳」12、渡部兼庸編、一四頁

一九九二 石刃技法における前処理、稜線づくりお

よび第一石刃について「東北文化論のための先史学

歴史学論集」加藤稔先生還暦記念会編、一一―一

二八頁

光石鳴巳 一九九六 石器の母岩類型「恩原2遺跡」岡山大学

文学部考古学研究室、九一―一〇三頁

望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里 一九九四 遺跡内

における黒曜石製石器の原産地別分布について「静

岡県考古学研究会」26、静岡県考古学会、一一二四頁

望月明彦・堤 隆 一九九七 相模野台地の細石刃石器群の黒

曜石利用に関する研究「大和市史研究」23、大和市

役所総務部、一一三六頁

望月 芳編 一九九六 「南鍛冶山遺跡発掘調査報告書第3巻」

藤沢市都市計画事業北部第二(二地区)土地区画整

理事業に伴う調査、藤沢市教育委員会

柳沢和明 一九七九 母岩別資料、個別別資料の分析「聖山」

東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2、

一八三―一九一頁

山下秀樹 一九八〇 個別別資料の分布 「寺谷遺跡発掘調査

報告書」平安博物館、二七八―三〇四頁

山中一郎 一九九六 接合資料の意味を問う「接合資料を讀

む」資料集 第4回岩宿フォーラムシンポジウム
笠懸野岩宿文化資料館、一一―一六頁

- 山本 薫・柴田 徹・高松武次郎 一九九七 ガラス質黒色安山岩製石器の石材産地推定方法に関する研究「縄文時代」8、縄文時代文化研究会、一—三〇頁
- 若林邦彦 一九九六 土器廃棄の過程を考える—亀井遺跡の遺構間接合土器の分析「大阪文化財研究」11、大阪府文化財調査研究センター、一三—二二頁
- 渡辺丈彦 一九九六 東北地方頁岩産地帯における石器石材の利用「史学」六六(一)、『三田史学会』一一—一三四頁
- Cahen, D. 1987 Refitting Stone Artefacts: Why Bother? HUMAN USES OF FLINT AND CHERT. Sieveking & Newcomer, ed.
- Cahen, D., L.Keeley & F.Van Noten 1979 Stone Tools, Toolkits and Human Behavior in Prehistory. CURRENT ANTHROPOLOGY 20:661-683
- Cziesla, E. 1990 On Refitting of Stone Artefacts. THE BIG PUZZLE International Symposium on Refitting Stone Artefacts. Studies in Archaeology Vol.1: 9-44
- Cziesla, E., S.Eickoff, N.Arts & D.Winter (eds.) 1990 THE BIG PUZZLE: International Symposium on Refitting Stone Artefacts. Studies in Modern Archaeology Volume 1. Holos Verlag.
- Goldberg, P., D.T.Nash & M.D.Petraglia 1993 FORMATION PROCESSES IN ARCHAEOLOGICAL CONTEXT. Monographs in World Archaeology No.17 Prehistory Press.
- Hofman, J.L. 1981 The Refitting of Chipped-Stone Artefacts as an Analytical and Interpretive Tool. CURRENT ANTHROPOLOGY 22: 691-693
- 1986 Vertical Movement of Artefacts in Alluvial and Stratified Deposits. CURRENT ANTHROPOLOGY 27 (2): 163-171
- 1992 Putting the Pieces Together : An Introduction to Refitting. PIECING TOGETHER THE PAST: Applications of Refitting Studies in Archaeology. J.L.Hoffman and J.G.Enloe, ed. BAR International Series 578 : 1-20
- Inizan, M.-L., H.Roche & J.Tixier 1992 TECHNOLOGY OF KNAPPED STONE. Préhistoire de la Pierre Taillée. Tome 3. Meudon : CREP
- Larson, M.L. & Ingbar E.E. 1992 Perspectives on Refitting : Critique and a Complementary Approach. PIECING TOGETHER THE PAST: Applications of Refitting Studies in Archaeology. J.L.Hoffman and J.G.Enloe, ed. BAR International Series 578 :151-161
- Leroi-Gourhan, A. & M. Brezillon 1966 L'Habitation Magdalénienne No.1 de Pincevent Près Montreuil (Seine-et-Marne). GALLIA PRÉHISTOIRE 9 : 263-3701
- 1972 Fouilles de Pincevent: Essai d'Analyse Ethnographique d'un Habitat Magdalénien (la Section 36). GALLIA PRÉHISTOIRE, 7th supplément.
- Schiffer, Michael B. 1987 FORMATION PROCESSES OF THE

ARCHAEOLOGICAL RECORD. University of New

Mexico Press.

Spurrell, F.C.J. 1880 On the Discovery of the Place Where
Paleolithic Implements Were Made at Crayford.
QUARTERLY JOURNAL OF THE GEOLOGICAL
SOCIETY 71: 238-253 (未見)

Tixier J, Inizan M-L, Roche H, 1980 Préhistoire de la pierre

taillée I. Terminologie et technologie. Paris, C.R.E.P.

Villa, P. 1982 Conjoinable Pieces and Site Formation Processes.

AMERICAN ANTIQUITY 47: 276-290

図2 引用報告書

①戸沢充則(一九六八) 埼玉県砂川遺跡の石器文化「考古学
集刊」四(二) 一―四二頁

②戸沢充則・安藤政雄・鈴木次郎・矢島国雄(一九七四)「砂
川先土器時代遺跡」所沢市教育委員会

③鈴木遺跡調査団編(一九七八)「鈴木遺跡Ⅰ」都市計画道路
小平2・1・3号線内 小平市鈴木遺跡調査会

④鈴木忠司編(一九八〇)「寺谷遺跡発掘調査報告書」平安博
物館

⑤戸沢充則・鶴丸俊明(一九八三)「多聞寺前遺跡Ⅱ」多聞寺
前遺跡調査会

⑥鈴木次郎・大上周三(一九八四)「栗原中丸遺跡」神奈川県
立埋蔵文化財センター調査報告3 神奈川県立埋蔵
文化財センター

⑦稲田孝司編(一九九六)「恩原2遺跡」岡山大学文学部考古

学研究室

⑧宮尾亨編(一九九七)「柳又遺跡A地点 第7次発掘調査報
告書」国学院大学文学部考古学実習報告第31集 国
学院大学文学部考古学研究室